

りました。

もう疲れて寝ておりました。そこにみたこともない車
が来て銃をかまえた兵隊一人と他の一人が起こしてくれ
ました。ジープに乗せられ、病院で手当をして、飛行機
に乗せられビカネールインド収容所に送られました。

逃 避 行

東京都 山 岸 利 治

昭和二十年四月中旬、ビルマ国(現、ミャンマー)シ
ヤン州に属するカローまで、メイクテラーからいのち
からがら敗走また敗走を続けた。カローに着くやいな
や、マラリヤ熱をおこし、まったく食欲もなく数日間、
四十度前後の熱にうなされた。

夜ともなると、二メートル角ぐらいの天幕シート一枚
をかぶって野宿を続けるしかなく、さらに、アミーバ性
赤痢を併発、一日二十数回野原の便所がよいで、心身共
に、ぐったりで、ますます食欲もなく一日中、フラフラ

の毎日でした。

幸いにして、カローには第三十三師団(弓兵团)に属
する兵站病院(竹の柱に、ニッパヤシの屋根があるだけ)
があり、ここへ入院ということになったわけです。

思えば、十九年四月から始まった中国雲南省竜陵・芒
市の戦場で、ゴム短靴、スゲ笠姿の中国兵の迫撃砲弾の
雨にさらされ、無敵帝国陸軍も連日の死傷者続出で、私
達の師団も転進を余儀なくされたわけです。

雲南攻略のため通過した要地を、今度は逆に、ラシオ、
メイミョウ、マンダレーをへて部隊の建てなおしと次期
作戦準備及び再建業務をおこない、十九年十一月より、
トングー県トングーで、約二か月警備に勤務した。その
間もほとんど毎日、敵機の銃撃を受けていた。

二十年一月、イラワジ河畔の戦況急となり、十分なる
再建もできぬまま、ピンマナ、ヤメセン、ピオボエをへ
てメイクテラーに向かったのです。すでにイラワジ
河畔の戦場で優位の英印軍は連日、戦車と戦闘機がペア
になつて地上掃射を繰り返し、帝国陸軍も支離滅裂、右
往、左往するだけで、穴から出ることもできず、文字通

り、いのちからがら、カローにたどり着いたわけでした。

イラワチ会議では帝国陸軍約十個師団が参加したわけですが、平時編成では約十五万人の将兵ははずが、すでにインパールの敗残兵はラングーン方面に敗退していたので、前述の雲南省の敗退師団、ミートキーナ、モンワ、ミンジャン等の敗退師団等だったので、実質では三分の一から五分の一の兵員ではなかったかと思われる。

また、この戦闘中も、ついで日本空軍の飛行機一機すらみたこともなく、友軍の戦車、重火器にも、お目にかかったこともなく、すべて私ども歩兵の三八式歩兵銃と夜襲攻撃用の破甲爆雷・手榴弾ぐらいでした。

病院では、ようやくマラリヤの特効薬キニーネをもらい、相変わらずの便所がよいだったが、やや、小康をたもつことができた。

約二週間ぐらい、このような状態の繰り返しであったが、四月二十五日、約百五十人ぐらいの戦傷・病者の患者後送がきまり、靴下一本の外米（約二合）とサイコロぐらいの岩塩と、手榴弾二発を腰にぶらさげて、後退することになりました。

折から、南方特有の雨季が始まり、どこへ行くのか。軍医も衛生兵もついておらず、ままよ、いのちあるまで歩こうということになりとぼとぼと後退を始めました。

この頃は、まだ小銃・帯剣も携行しており、ようやく五日目ぐらいでロイコに到着、ロイコに数日休養して、さらに五日間ぐらいでケマピューにつきました。

ケマピューの近くにモウチ鉱山という所があって、温泉がわいていると聞き、すでに半年以上も前にドラム缶風呂にはいったのみだったので、むしろ風に風呂にはいりたかったが、なにしろマラリヤとアメーバ赤痢のフラフラ人間では、約四〜五キロ先までは行くことができず、あきらめざるをえませんでした。

ケマピューで四〜五日休養して、いよいよ泰国境に向けてジャングルの間道に行くことになったのだが、まだまだ敵の飛行機が超低空で飛来するので、昼間はもっぱらジャングルにもぐり、夜行軍の連続だったので、ますます疲労もはげしく、骨と皮ばかりの状態でトポトポと行軍を続けたわけです。

もちろん、雨季のさいちゅう、着ているものすべて肌

まで、ずぶぬれの毎日であり、昼間、時折陽の射すこともあって、着のみのままの乾燥で、濡れたり、乾いたり、の繰り返しでした。

また、大体四〜五日歩いた程度の所に兵站があり、少量の外米と岩塩はもらえるので、雑草（野菊のような葉）を三回ぐらいゆでて、灰汁を抜き、岩塩をなめながら、飯盒のポロポロ飯を食べる次第で、雨季のさいちゅう、人間はなぜ一日に三回も食事をせねばならないのか。やれやれ不便な動物だとうらめしく感じたことでした。

また、枯枝を集めて雨の中の飯ごう炊さんには、体をおおいかぶせて、火に雨があたらないようにせねばならず、雑草をゆでたなかへ、岩塩を入れて、塩汁にした方がよいのに、とも思ったりしたが、岩塩がなくなったら、つぎの兵站まで岩塩がもらえないので、なめることしかできませんでした。

夜道をトポトポ、一日約十キロぐらい歩き、昼間はジャングルでのシラミとり、時折、近距離での轟音にびっくりさせられたことで、また今日も手榴弾による自爆かと、やがて我が身の番になることを思うと、合掌せ

ざるを得ませんでした。

すでに、カロリーを出てから、一か月以上もトポトポ歩いては休み、またトポトポ歩きの毎日だったが、キニーネマラリヤは、ほとんど発熱することもなくなり、アマーバ性赤痢の方は薬などなかったが、毎日の飯盒炊さんのあと、「ケシ炭」を粉にして飲んだことが効をそうして（特に竹を焼いたけし炭が効果があった）便所にいく回数も少なくなり、六月中旬には痩せて栄養失調ではあるが、病状も好転していました。

このころには、我々の行く先も、泰国のチェンマイで、泰国境も近いと聞いて、勇気づけられました。

すでに、自爆者、脱落者で、我々グループも約二十人ぐらいが一団となって相変らずのトポトポ歩いては休み、またトポトポ歩きの繰り返しだったが、七月初旬、ようやく泰国境を通過することができ、やや元氣を取り戻しました。

もう、これで、手榴弾による自爆をしなくてもよさそうだと思うようになり、仲間の手榴弾と共に、幅五メートル、一〇メートルぐらいの川がたくさんあるので、交

互に手榴弾を川に投げて魚採りをして、何年振りかで米養補給ができ、本当に小魚はおいしいと生き返った気持ちでした。

それから、数日間の行軍で泰に駐留の友軍のトラックに便乗させてもらい、昭和二十年七月二十四日、待望のチェンマイに到着、第一〇五兵站病院に収容されたわけです。